

2020年1月31日(金)

老球の細道522号

## 1月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「毎日がお正月」「毎日が誕生日」「毎日がクルシミマス」をモットーにしている私なので、今年もお正月から冷静にスタート。しかし、今月は恩師や叔母などの思わぬ訃報が連続し、改めて「死を想え！」を確認させられた。老人の元気な姿がクローズアップされるが、人間の寿命には限界があることをふまえ、日々新たに、日々向上を目指し、昨年よりもレベルアップした自分になれるよう「ネズミが塩を引く」。あっという間に1月が終わった。

### 1・テレビから

◆「人は城 人は石垣 情けは味方 仇は敵」〈NHKB S：ザ・プロファイラー：武田信玄〉：

改めて、大きな仕事をなすには自分一人では不可能。多くの人の協力があってこそ可能となる。ある神社の石碑にも「恩は石に刻め、憎しみは水に流せ」と。

◆「麒麟が来る・・・アサヒビール」〈朝日川柳：かたえくぼ〉

キリンビールしか飲まない人がいる。ビールや選手にはそれぞれ特徴があり良さがある。

### 2・読書から

◆「意志の強さは手ごわい相手との激突に耐え続けるところにある」〈上田薫著『個を育てる力』明治図書〉：指導者は子どもの自己主張に対して寛容であるべきである。圧力に耐えて自己主張できる人間を育てることこそ指導者の本務である。手ごわい選手、手ごわい保護者との冷静なバトルが指導者の意志を強くし、指導者を越える強い選手を育てる。

◆「スポーツは元来遊びである。“遊び”に精神力は不必要である」〈玉木正之著『スポーツとは何か』講談社現代新書〉：遊びとは楽しくて、面白くて、全てを忘れて無我夢中になって取り組むものである。時として財産までも失うこともある。スポーツの原点を忘れて、楽しんで取り組まないから、うまくいかないとすぐに精神力のせいにしてしまう。

### 3・新聞から

◆「人間というのは、男女とも、たのもしくない人格に魅力は感じないのである」〈朝日：折々の言葉：司馬遼太郎〉：「こんなときあいつがいたらなあ」「ここ一番の勝負時に最後の1本のシュートを託されるプレイヤー」、そんなふうに通ってもらえる人になりたかった。

◆「次に必ず会えるかはわからない。気持ちよく別れよう」〈朝日：私の折々の言葉コンテスト〉：今年のお正月に電話で新年のあいさつをしたばかりの千葉の叔母が、数日後突然心臓病で急死した。体調がすぐれないと病院へ行ったきり帰らぬ人になってしまった。日常生活で人を送り出す時「行ってらっしゃい。必ず帰ってきてね」の一言をプラスαしたい。

◆「人生の道筋から山を削り谷を埋める造りが全体的に行きわたる時、起伏の向こうを見る視力は退化し、その状態に慣れる時、視力回復への意欲さえもが萎えしぼんでしまう」〈朝日：多事奏論・高橋純子〉：クリーンで快適な感性の牢獄「安楽への隷属」への戒めである。